

【一】評論文

〈出典〉『グズをなおせば人生はうまくい

く』大和書房

グズはなぜ大忙しなのか、言い訳の達人、完璧主義者、段取り人間、遠慮しすぎる人：グズの原因を明らかにしスッキリ人生に向かうための本。時間不足や人間関係のモヤモヤを解消してくれるヒントを提示している。

考える具体例を示しているので、例示の接続語を入れよう。

問三 呼応の副詞

この文は「くくれたとしても」と続くので、エ「たとえ」がくる。呼応の副詞はパターンとして決まっているので確実に学習しよう。読むときだけではなく、話す・書くの場面でも役立つ知識になる。

〈作者〉 斎藤茂太

一九一六年生まれ、医学博士。日本ペンクラブ理事。斎藤病院名誉会長。長年、家族・夫婦・子育て・心の病・ストレスをあつかう傍ら、執筆、講演活動などでも活躍中。

問四 かかり受け

「いつも成功するとはかぎらない。」の文は「いつも／成功するとは／かぎらない。」と文節で区切ることができる。「いつも」は「かぎらない」ではなく、「成功するとは」にかかる。一文の係り受けは意識することが少ないと思うが、敢えて注意していくことが必要だ。

問一 語彙

漢字の学習は国語の学習の基本。読み書きだけでなく、意味・使い方・熟語の構成などを意識して学習すると、高校生からの学習にもつながる。時間のかかることだからこそ、しっかりと確実に取り組もう。

問五 同義関係の理解

傍線部に続く文で、「ただしAではなく、Bだ」という形の文がくる。このような構造の文ではBの部分に主張がくる。ただし、問題の選択肢にはAの部分の言い換えが来ているので注意しよう。また、そのあとに「つまり」と言い換える接続が入り、「失敗した原因をとことん突きとめるのである。」とあるので、正答はウになる。アは本文の内容では全く述べられていない。イは反省することについて述べられていないので不適。エはその後の部分まで踏まえた選択肢のようであるが、傍線部の言い換えとはならず、さらに、努力の方向を考えていないので不適。

問二 接続語

Aは、反省するには「勇気がいることだ」を受けて、「ここできちんと反省しておかないと」と続くので、逆接を入れよう。勇気が必要なので、実行するには難しいことであるが、実行しないといけないのである。Cは「あらかじめ最悪の事態を予測しておくのもいい」をうけ、リストラされた人が最悪の状態を

問六 本文中の表現の意図や効果

「失敗の『恩恵』」とは成功へ近づくことをさす。本来、失敗は目的を達成できないことで、マイナスの結果であり、得るものはない。しかし、筆者はそこから経験というプラスのものを得られることを強調したのである。文中に「」や「」が用いられる場面は筆者がより強調したいときや、本来の意味以上の、別の意味を持たせたいときに使うものであるので、しっかりと意識して読むようにしましょう。

問七 対比と因果関係

ここまでの内容把握。失敗した後も反省することで得られるものがあり、そこから再び挑戦していけば目標に近づいていくというのが筆者の主張である。本来の意味とは違う失敗を、筆者が述べているのである。それらをまとめて「イ。アは「自分で考えて努力しなくても」が不適。ウは「評価してくれる人が現れて」が不適。エは「自分自身の弱点に向き合う強さ」が不適。

問八 因果関係と要約

「かもしれない」と始まる段落の、最悪まで考えると良い意味で開き直る、という内容と「それに」と始まる段落の、最悪よりみただと余裕が出るという、二つの要素を含んだものがウ。イ、エはそれぞれ一つしか含まないので不適となる。本文の内容とは間違っていないのにもか

かわらず、間違いとなるのは納得いかないかもしれないが、このように、解答に必要な要素が二つ以上ある時には、それらをすべて含んだものを選ぶということを意識しておこう。アは本文の内容にないので不適である。

問九 故事成語

中国の故事から生まれた慣用句を故事成語という。「人間万事、塞翁が馬」もその一つ。成り立ちはエのような故事からである。もし、この故事成語を知らなくても、続く部分で「いいことと悪いことは繰り返し起こる」とあるので、そのことに合致するものを選ぶ。

問十 文学史の知識

年代も様々な歌であるが、それぞれ有名なのでその周辺の年代で活躍した歌人も含めて学習しよう。アが斎藤茂吉の作。茂吉は明治から大正にかけて活躍した。イは新古今集にある持統天皇の句。万葉集から古今、新古今まで有名な歌は押さえておこう。ウの作者は菅原道真。こちらは漢詩文の方面でも有名である。外国文化とのつながりも含めて学習しよう。エは俵万智の句。現代を代表する歌人である。

【二】小説

〈出典〉『ここが青山』

三十六歳で会社が倒産。次の日から妻は働きに出かけ、男は家事と息子の幼稚

園の送り迎えをはじめ。元上司、元同僚、親など周りの心配をよそに主夫としての生活を楽しむ自分がいることに気づき始める短編小説。

〈作者〉奥田 英朗

岐阜県岐阜市出身。岐阜県立岐山高等学校卒業。プランナー、コピーライター、構成作家を経て一九九七年『ウランバーナの森』でデビュー。代表作である精神科医・伊良部シリーズの第二作目『空中ブランコ』で第一三一回直木賞を受賞した。

問一 語の定義・文中での用法・慣用句
漢字同様、意味や使い方、成り立ちまでおさえておこう。語彙を豊かにすることが国語の学習の基本だ。

問二 文学的表現の理解
無色透明というのは他の色がなく、つまり意図がないさまの比喩である。「自然」ともあるように、普段から考えていることをそのまま口にしただけの様子をあらわしている。比喩はその言葉の意味と、どこに共通点があるのかを意識しよう。

問三 間接的な心情表現の理解
行動にはその人物の心情が現れる。「眉をひそめる」という不快感をしめす慣用語があるが、それに似たように、パン屋のおばさんに対してマイナスの感情があることが分かる行動である。しかし、その後の祐輔の発言の後には笑っているよ

うに、そこまで強いものではない。また、その前後の祐輔の会話からも、周囲に誤解されていることに対して自分たちの考えていることとは違うと思っていることが分かる。それらも含めて、イを解答しよう。アは家庭の現状が情けないという厚子の気持ちは読み取れないため不適。ウは毎朝挨拶することに対して怒りは読み取れないので不適。エは笑顔をつくることに対しての不満ではないので不適。

問四 対比的な心情理解
両親ともに自分の息子が失業したこと
を伝え聞いて、心配している心情を読み取ろう。また、会話の内容も息子の現状を心配し、励まそうとしているものである。母はその中でも、「赤ちゃんの肌を撫でるような」とあるように、優しき、愛情を持って接していること、父は「無理やり作ったような穏やかな」声で、平静をよそおおうとしていることがわかる。傍線部の言い換えをきちんと意識して解答しよう。

問五 故事成語と文中での意味
「人間到る処に青山有り」の意味は「世の中、どこにでも骨を埋める場所がある」と本文にある。本来の意味では「だから、故郷を出て、大きく活躍すべきだ」と続くが、ここでは、父親の発言の前後をしつかりと読んでいこう。「励ましの言葉を一生懸命考え」や「樂觀していればいい」とあるように、励ます意図でこの発言をしていると読みとろう。イは仕事を促し

ているわけではないので不適。ウは餓えて死ぬことの心配について述べているるわけではないので不適。エは実家に帰ってきてても良いということではないので不適。

問六 要旨（主題）の理解

電話が終わった後の厚子との会話でも互いが笑っているように、この状況でも二人は楽しめている。その上で、翌日からの厚子の弁当も作ることを提案し、それに向けた準備に取り掛かる姿からも、この生活に対して、さらに前向きに過ごすようにしている心情を推測したい。行動から心情を考えることは容易ではない。だからこそ、しっかりとトレーニングを積もう。アは厚子への心情が不適。二人とも今の生活を楽しんでおり、「家長の責任」も二人の間では冗談として流せている。イは祐輔が疲れているという描写はない。ウは料理で生計を立てようとしている描写はなく不適。

問七 文章表現の特徴

二人の口語的な表現を使った会話を通して、心情を示していくのが特徴である。普段の日常で使われるような表現を使うことにより、読者にも自然な印象を与えるのである。イは情景描写もなく、不適。地の文でどのような表現が用いられて、どの視点で書かれるのかは注意して読むようにしよう。ウは地の文でも心内語は多くあるので不適。エは上達していく描写はあっても、家族が成長というような

描写はないので不適。

【三】古典（古文）

〈出典〉『今昔物語集』(巻二十四の十六) 『今昔物語集』は平安時代末期に成立したと見られる説話集。日本最大の説話集で作者は未詳。全三十一巻、一〇四〇話。仏教説話を中心に天竺（インド）、震旦（中国）、本朝（日本）の様々な説話を収録している。

問一 歴史的仮名遣いの理解

古文には歴史的仮名遣いという現代語と異なる表記が見られる。語頭以外の「は行」は現代語の「わ行」。「む」は「ん」と読み、「ぢ」は「じ」である。古文はこれに従って読む。よって、a「恥ぢ」は「はじ」。「やむごとなし」は「やんごとなし」。「いひける」は「いひける」となる。この歴史的仮名遣いの基礎をおろそかにすると、単語が正しく認識できなかったり、語句の切れ目がわからなかったりなど読解する上での様々な問題が生じるので、確実に身に付けておきたい。

問二 指示語と古典知識

中国で作られた「陰陽五行説」に基づく教えを「陰陽道」といい、この考え方を基礎として平安の都は作られた。そして、この陰陽道に則って占いなどを行ったのが、陰陽師達である。星の動きを読み、未来を占うだけではなく、超常的な能力や霊力を持ち、不思議な術を使って活躍した。清明の教えられた「この道」とは、前文の陰陽師の教えのこと。すなわち、「陰

陽道」のことである。この問いに限らず、古典には現代とは全く異なる常識や、古文特有の知識が必要となる場合が多い。便覧などをしっかり読んで基本的な知識を身に付けておこう。

問三 主語・述語の呼応関係

「「こころもとなきことなかりける」とは「心配なことなど何一つなかった」という意味になる。その前の文章には、師匠の忠行の名があるが、ここで言及されているのは、本文の最初に挙げられている天文博士、「安倍清明」のことである。忠行は清明の師として挙げられているのである。本文を確認すると「この道を習ひける」とあるように、道を習ったのは、その忠行が教えを授けた弟子のことだとわかるので、答えは「イ」の清明が正解となる。古文ではよく主―述の関係が省略されて使われるので混乱してしまうかもしれないが、前後の文脈や会話などのやり取りなどをしっかりと確認して主語と述語の対応をしっかりと把握できるようにしよう。

問四 内容理解と指示語

前の「清明これを見けるに」の、前文に注目。指示語は性質上、前文の事柄を指し示す場合が多い。指示語の問題ではまず初めに全文を確認する癖をつけておこう。前文を確認すると、「清明見ける」とあるので「これ」が指しているのは、そのすぐあとの「えもいゝけり。」となる。よって正解は「えもいゝけり。」となる。古

文も現代文も日本語としての基本的な部分は全く変わることはない。現代文を読解するときと同じく、接続語なども含め、言葉の性質を踏まえた論理的な読解を目指そう。

問五 内容理解(因果関係の理解)

「去り難く思ひて」とは、「手放したくないと思つた」という意味であるが、前文を読み、出来事を時系列順に整理し、因果関係をしっかりとらえなくてはならない。まず「その後」とあるので、前文の出来事を読むと、「清明これを」とある。清明は鬼を発見し、これを忠行に知らせたのである。それにより忠行は驚き(目覚めて)、身を隠すことができたのである。清明がいなければ、忠行は目覚めず、鬼と鉢合わせになつていたのであることが予測される。清明のおかげで難を逃れたのである。その本文での出来事に合致しているのは選択肢「ウ」のみ。よって答えは「ウ」。

問六 比喩(文学的表現)の理解

まず、問五でもあったように、「清明を去り難く思ひて」とは「手放したくない」という意味である。また、清明の活躍によつて鬼から逃げおおせることができたという出来事が前文にある。さらには、「瓶の水をそのまま移し替える」という言葉の意味にも注目したい。「この道を教える」際に、「水をそのまま移す」のだから、意味としては『自分の持っているものを受け継がせる、そっくりそのまま渡

す』ととることができる。それと合わせて考えると、教育や指導の場であれば、それは「丁寧に教える、技を直接受け継がせる」意味ととらえられる。そのため、晴明の活躍と合わせて正しく因果関係を整理するならば「晴明が活躍したことによって、晴明への信頼を強くした結果、晴明に自分の技を水を移し替えるかのように熱心に教育した」となる。よって答えは「イ」となる。問五・問六とも共通して言えることだが、古典の物語であっても、現代文の小説と同じように多義語は登場するし、文脈によってその言葉の意味が多少変わってくることもある。もちろん、同じく時系列に沿って出来事を整理し、そのうえで読解するという基本も変わらない。因果関係を問う問題ではそのような点に注意しよう。

問七 本文の趣旨

前述したとおり、本文の内容・出来事、登場人物の心情などを指示語、時系列、因果関係に注目して整理し、そのうえで丁寧の一つ一つ検討していこう。まず、「ア」は「古のく恥ぢず」と本文にあるので、「ひけをとらなかつた」と合致するので○。次に「イ」は「忠行、車の内にしてよく寝入りにけるに」とある。さらには鬼を発見して知らせたのが晴明であることから、「忠行はく見つけた」が合致しないので×。「ウ」は「平らかに過ぎにける」が晴明のおかげで難を逃れた出来事と合致するので○。「エ」は「公私使われて」と「公私にわたり重用された」と

いう内容と合致するので○。本文すべての内容を一度に問う問題ということで焦ってしまうこともあるかもしれないが、前述したとおり、本文の内容を時系列と因果関係に気を付けながら整理できれば楽に解くことができる。現代文の小説と同じくそういったことに気をつけながら読む習慣を身に付けていこう。

【現代語訳例】

今となつては昔のことだが、天文博士、安倍晴明という陰陽師がいた。昔の陰陽師達にも引けをとらないほどのすばらしい陰陽師であった。幼いころ、賀茂忠行という陰陽師に陰陽道を習い、その腕前は少しも心配なことがないほどであった。さて、その晴明が若かったころ、師匠である忠行が下京へと夜に歩いていたら、晴明は御供をして牛車の後ろから徒歩でついて歩いていった。

忠行は車の内でよく眠っていたのだが、晴明が前を見ると、言葉では言い表せないほどの恐ろしい鬼たちが車に向かって前方から向かってきていたのである。晴明はこれを見て大変驚き、車の後ろに走り寄って忠行を起こしてこのことを告げた。その時初めて忠行は目覚め鬼が来るのを発見し、不思議な術を使ってすぐさま自分の身の危険を無くし、お供の者たちの身を隠し、何事もなくやり過ごすことができた。

その後、忠行は晴明を手放したくはないと思ひ、陰陽道を瓶の水を移すかのように熱心に晴明に教えた。そうであつ

たので、ついには、晴明はこの陰陽師の道につき、公私関係なく重用され、その活躍ぶりはたいそう素晴らしいものであったという。